

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の「英語（筆記）」試験問題は、高等学校段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを目的に、次のような方針のもとに作成した。

- (1) 高等学校学習指導要領に準拠し、実践的コミュニケーション能力の達成度を測る。
- (2) 現代の標準的な英語を言語材料とする。
- (3) 語い、語法、慣用句、文法、表現に関する知識だけでなく、社会言語的側面、談話的側面、方略的側面も含め多角的に測る。また、応用力や思考力を測るような課題を工夫する。
- (4) 取り上げる題材は、受験者にとって有用で一般的なものを選ぶ。
- (5) 問題は易しいものからやや難易度の高い発展的なものまで幅広く用意し、受験者の達成度を公正かつ正確に測ることができるよう留意する。使用する語いは、高等学校における英語の履修範囲を考慮して選択する。長文読解や読解方略にかかわる問題においては、やや難度の高い語句を使うこともあるが、その場合でも文脈から容易に推測できるようにし、またその語いの意味の理解が解答に直接影響しないように配慮する。
- (6) 過去の評価委員会報告書において要望や批判があった事項について、出題の形式、内容の改善を図る。

2 各問題の出題意図と解答結果

上記のような原則を踏まえながら、高等学校卒業段階で到達すべき英語力を公正かつ正確に測定するためには、どのような形式でどのような問題を課すのがよいかを検討した。そのために、2008年度（以下「昨年度」という。）までの問題形式や内容を詳細に分析し、どの部分を継承し、どの部分をどのように改訂・修正を施すのがよいかという課題に取り組みながら、問題作成に当たった。最終的には、試験問題を第1問から第6問の六つの大問で構成することとし、設問形式16種類、総設問数47問、配点2～6点で出題した。

第1問 第1問は、英語の音声に関する理解を試す問題である。

第1問の問題については、従来から、高等学校での音声指導を促すためにも必要だという意見がある一方で、音声を伴わない筆記試験では音声技能を適切に測定することができないという意見もある。リスニングテストのセンター試験への導入から4年目を迎え、問題作成部会では第1問のあり方について、原点に帰って慎重な議論を重ねた。その結果、文レベルの問題を新形式のDとして新たに設け、設問数を1問減らすこととした。

Aは基本的な単語の母音、子音を識別する能力の測定を目標としている。問1は、absorb, comfort, formal, newborn の下線部の発音のうち、弱勢のあいまい母音が含まれるものをほかと区別する問題であったが、正答率が極めて低くなった。重要な音声的学習事項でありながら、これまであまり試験で問われてこなかったことが一つの要因として考えられる。一方、問2、問3は中程度の正答率を示した。

Bは、基本的な単語の語強勢の位置を特定する問題であるが、昨年度のような強弱の関係を表す大小の黒丸や2007年度（以下「一昨年度」という。）のような音節区分表記は使用しなかった。Dで表面的に類似しているが意味機能の異なる黒丸を使うことにしたため、併用が紛らわしいことと、現実のコミュニケーションの場において、このような視覚的補助のない状態で、語強勢の位置を見極めなければならないことが、その大きな理由であった。正答率は高く、受験者がこのような問題形式に十分に対応できていたことが示唆される。

Cは、下線が引かれた文強勢の位置を手掛かりに、発話者によって意図された含意を推測する能力を測る問題であったが、昨年度の3問から1問に減らした。正答選択肢が強調構文によって構成されているために強調点がとらえやすかったのか、正答率はかなり高く、受験者にとって理解しやすい問題であったと考えられる。

新形式のDは、正しいリズムや強勢で文を発話する能力を測る問題であった。新形式の問題でありながら、正答率は標準的な水準を示した。「テスト総得点が高い受験者が正答」する傾向も顕著であり、選択肢の選択も適度に分散する結果となった。

第2問 第2問は文法、語い、社会言語的知識及び技能の測定を目的としている。A、B、Cいずれも、昨年度までとほぼ同様の形式で出題した。

Aは与えられた文脈にふさわしい語句を選ぶ問題で、文法、語法、語いの力を試している。対話形式の問題を一部導入し、より具体的な文脈の中で、目標とする言語事項が使用できるかに重点を置いた。その結果、正答率は全体としてやや低めで、2割台から8割台の項目まで分布の幅が大きくなった。問3の“in the direction of（下線部が空所に入る正答）…”は比較的によく使用される表現ながら、抽象的概念である‘direction’に前置詞の‘in’が呼応する連語的關係を、受験者はとらえにくかったようである。問5は、通常は可算名詞として扱われる‘egg(s)’が、殻が割れて個別化できない文脈の中では、不可算名詞として扱われることを理解するのが難しかったようである。問10は、“…runs in the family”の‘run(s)’という基本的な対象語の意味を文脈から理解できるかを問うものであったが、テストの総得点が高い受験者にとっても語感をイメージするのが難しかったようである。

Bは与えられた対話文の空所の部分に社会言語学的に適切な発話を補充する問題である。昨年は6割前後から8割前後とやや高い正答率であったが、本年度は3割台から6割台とやや正答率が下がった。“I’ll tell you what.” [19]のように日常的な口語定型表現であっても、文脈から意味を推測しにくかったためか、総得点の高い受験者にとっても意味をとらえることが難しかった項目もあった。

Cは与えられた語句を並べ替えて文法的に正確な文にする問題である。今年度は、問題文の前に状況を設定する文を設け、空所の数を5から6に増やすことで、より自然で多義的な解釈がしにくい並べ替えの問題作成を目指した。三つの問いの正答率には比較的大きな幅が見られたが、問3の正答率が一番低かった。高等学校教科担当教員（以下「教科担当教員」という。）の指摘にもあるように、if節を伴わず、従属節が主節の後に置かれ、倒置構造の仮定法過去完了の表現であったため、複合的にこの問題が難しくなったと考える。

第3問 第3問は文レベルを超えた談話レベルにおける英文の理解力を試すことを目的としている。正答率は4割台から7割台と昨年度よりも幅があったが、全体として適切な難易度であっ

たと思われる。また、すべての項目において、テストの総得点が高い受験者の正答率が高くなる傾向が顕著に確認できた。

Aは、短い文章を読ませ、文脈の理解から未知の語いや慣用句の意味を推測させる問題で、談話レベルにおける英語理解力を測定することを目的としている。正答率から問1、問2ともに適切な難易度であったと考えられ、テストの総得点が高い受験者が正答する傾向も顕著であった。読んでいる英文の中に知らない単語が出てきたらすぐに辞書を引いて調べるといふ、受け身の学習方法から脱して、自分なりの推測を交えながら読み進むという方略（reading strategy）を使って学習する習慣を身に付けることが大切となる。

Bは趣旨が明確なまとまったテキストを英文で読ませ、発言の意図を問うことにより、談話レベルにおける英語理解力を測ることを目的としている。友人関係についてのクラス討論の中で提示される様々な意見を読み進める中で、受験者にはそれぞれの意見の趣旨を簡潔にまとめるのにふさわしい英文を選択肢の中から選ぶことが要求される。昨年度は学校新聞に掲載された3人の生徒の意見を読んで、それぞれの意見を一文に要約した適切なものを選ぶ問題であったが、いずれの場合も、テキストの趣旨を正確に理解する能力が求められている。身近な話題であったためか、3問とも、やや正答率は高めであったが、総得点の高い受験者ほど正答率が高くなる傾向を強く示した。

Cは、複数のパラグラフから成る文章中の空所に、文脈にふさわしい内容の表現を補充する問題形式で、談話レベルにおける英語理解力を測定することを目的としている。昨年度は3問とも長めの語を補充する問題であったが、今年度は、問1に段落間の論旨を整合させる文レベルの補充問題を設けることで、文章構成能力の側面を更に強く意識した問題作成を意図した。正答率は4割台から6割台であったが、3問のいずれにも、総得点の高い受験者ほど正答率が高くなる傾向が顕著に見られた。

第4問 第4問は、情報处理的視点からの英語理解力を試す出題である。

Aは、図表やグラフに示された情報と合わせて英文を読ませることにより、必要な情報を特定する能力を測る問題である。本年度は、熱帯雨林の保護に関する文章をブラジルにおける熱帯雨林伐採状況の変化を表したグラフとともに提示した。受験者は、文章とグラフから得られる情報を総合的に理解して、問いに答えることが要求される。問2は、文章とグラフの情報を組み合わせることで、類推できる事実を導き出すことを求める問題である。問3は、最終段落の第2文を正確に読み取れば、正答を導くことができたと思われるが、同段落内に含まれる情報を誤って解釈した二つの錯乱肢の選択率が高く、やや難しい問題となった。

Bは、様々なタイプの英文やレイアウトを含む英文を題材に、必要な情報を的確に探し出させることにより、情報処理の一環として英語を理解する能力の測定を目的としている。今年度は海外滞在や生活で遭遇するかもしれない問診票に書かれた記述を読み、求められた情報を得るというものであった。昨年度の問題において、夏季集中講座の参加費用を計算する内容が、現実的なタスクでありながら、計算が紛らわしく、計算ミスによる誤答を招きやすいとの指摘を受けて、基本的な計算を要するが、計算によるミスが起きにくい問いを設けた。3問中2問は正答率が非常に高かったが、正答選択肢と錯乱肢を見分けるのが受験者にとって易しかったことが予測される。

第5問 第5問は視覚情報を含む英文の理解力を測定対象としている。今年度もイラスト、位置関係、漫画などの非言語視覚情報を中心に構成された素材と、そこに表された情報を再構築した英文との関係を正確に把握する能力を測定する形式を採用した。正答率は中程度から高いものまであり、昨年度より幅が広がったが、教科担当教員からは、受験者にとって読みにくく、正答を導くまでに時間がかかったとの指摘があった。

Aは、与えられたイラスト、位置関係、図柄等から得られる情報を正しく描写している英文を選択肢の中から特定させる問題である。受験者はイラストで描かれた視覚的イメージを念頭に置いて四つの文章を読み比べ、イラストと英文との間を行ったり来たりしながら、適確な文章にたどり着くという作業が必要となる。昨年度は犬と猫の関係がとらえにくいという批判があったため、一つの対象（drum major）に焦点が絞られるようにイラストの細部の描写を明確にし、説明の具体性を増すように工夫した。受験者は、“drum major”の表現になじみがなく、他のマーチングバンドのメンバーとの対比もイラストにないため、状況をとらえるのに時間がかかったかもしれないが、正答率は6割台と適切で、総得点が高い受験者の正答率が高くなる傾向も顕著に確認できた。

Bは、与えられた英文を読み、その内容を正しく表現している図柄を選ぶ問題である。昨年度は抽象画を題材にし、描かれている様々な図形の種類とそれら相互の位置関係を英文で正しく読み取れるかどうかを試した結果、正答率は高かったが、「現実的タスクとは言えず、問題のための問題とも感じられる」との指摘もあった。今年度はこのような批判を受けて、具体的な橋の形状を説明する文章とイラストを結び付ける問題を設けた。正答率は中程度であった。

Cは、4コマの連続する漫画を見てストーリーを理解し、それにふさわしい文章を与えられた四つの選択肢の中から選び取る問題であった。選択肢の文章の量はかなり増えたが、引越しの状況で現実には起こり得る状況を描写した内容で、落ち着いて読めば正答選択肢と錯乱肢の違いが識別できるためか、正答率は高かった。

第6問 第6問は、まとまった内容の比較的長い英文を読み、話の展開、概要、要点などを理解することができるかどうかを測る問題である。単に表面的な事柄だけでなく、筆者が読者に伝えようとしているメッセージや行間の意味の理解、パラグラフの要点の把握などを通して、英文を適確に理解することができるかどうかを測定の対象としている。

今年度の本試験では、問2で、指定された複数段落の内容の差異、問6では、文章全体の段落構成を問い、問3で、文章中で述べられた見解の具体例、問6では、筆者が文章中で含意する内容を見いだすことを求めるなど、総合的な視点から個々の文、段落、そしてそれらの有機的な関係を理解し、その概念を主体的に再構築する実践的な読解力を追及する趣旨を明確にした。

英文の内容は、筆者が自らの英語辞書使用の体験を振り返りながら、それぞれの辞書の特徴と用途を説明していく内容である。英語を学習する受験者にとって身近で有用なトピックであったと考えられる。正答率は3割台から6割台で、いずれの項目も総得点が高い受験者が正解する傾向が顕著であった。その一方で、前問までに解答時間を多く費やしたため、第6問を解答するのに十分な時間を取れなかった受験者がいたという指摘もあった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

本年度は第1問のCを除いて、大きく形式を変更した問題はなかったが、昨年度の問題で改善の指摘を受けた点を踏まえて、問題形式の調整、内容面の充実化を図った。その結果、センター試験実施後に寄せられる質問等は例年に比べて少なく、各方面からのコメントもおおむね肯定的であった。問題作成部会においても、センター試験を受験する広範な能力層の受験者に対応するような項目を配し、実践的コミュニケーション能力の習得を目標とした高等学校学習指導要領の趣旨にそった問題を作ることができたと認識している。しかしながら、その反面、総語数がやや増えたことにより、一部の受験者が問題を最後まで解くことができず、戸惑いが見られたという報道や指摘もあった。平均点は目標とした120点（100点満点の換算で60点）には至らず、115.02点（同57.51点）であり、過去5年間（昨年度125.26点、一昨年度131.08点、2006年度127.52点、2005年度116.18点）で最も低い数値となった。教科担当教員からは、特定の大問を中心に使用語数が増え、受験者の負担感が増していると指摘があった。問題作成部会においては、このような意見を真摯に受け止めて、可能な修正点について検討を重ね、今後の作題の改善につなげていくことが必要である。

4 まとめと今後の課題

新高等学校学習指導要領のもとで学んだ高校生がセンター試験を受験する4年目を迎え、新しく導入されたリスニングも今年で4回目となった。このような状況の中、本年度も、リスニングとの兼ね合いを考慮に入れて筆記試験の出題内容を調整し、許容される範囲内での改訂を試行錯誤しながら、新形式の問題を出題するという基本姿勢で臨んだ。どこまで変化が許容されるかは、問題作成委員にとって重要な課題である。大きく変化させると、受験者を不安にさせるなど好ましくない影響を及ぼしかねないということは十分に承知しているが、対象とすべき実践的英語コミュニケーション能力をより適切に測定するテスト作題の可能性があるにもかかわらず、従来どおりの形式を踏襲するというのは、問題作成部会が目指すべき方向ではない。その一方で、教育現場からの評価が高い問題ながら、諸々の理由から、継続が廃止されるものもあれば、教育的効果が期待されながら、実を結ばぬまま消えていく新問題の理念や形式の候補もある。いずれにせよ、受験者の立場からは、変化がある場合はあらかじめ公表してほしいという要望も根強く、テスト課題や形式をどの程度変化させてよいのかを他の委員会とも十分に協議し、大学入試センターとしての基本方針をまとめておく必要がある。問題作成部会としては、今後も与えられた条件の中で、可能な改善の方向性を探りながら、安定化に向けて最大限の努力を払い、公正かつ正確で良質な問題の作成に取り組んでいくべき姿勢に変わりがないことは言うまでもない。